外国語教育と聴覚障害教育における言調聴覚論の研究

研究員　内　藤　史　朗
研究員　禿　　憲　仁

言調聴覚論とは何か

聴覚の正常な学生の外国語教授法は種々あるが、聴覚障害をもつ学生や児童にいちじるしく有効な教授法は、とくに科学的な発語法は、今までのところでは、言調聴覚法（言調聴覚論による教授法）に勝るものを知らないという人もいる。

研究グループの一員で聴覚障害教育に関心のある者が、この理論と教授法に心動かされたのは、上智大学聴覚言語障害研究センターで、主任研究員（元聾学校教諭）が就学前の男子の発語訓練を記録したテープを聞いてであった。グベリナの教授法で教える前の、その子のことばは、何を言っているのか、さっぱりわからないものだった。しかし、この教授法で教えた後の、その子の話すことばは明瞭に意味が判った。

想えば、聴覚が正常な者の外国語も、これに似たことがあるのではないだろうか。自分はまともに話しているつもりでも、相手の外国人には気の毒なくらい聞き取れないことがある。

聴覚障害者の場合、失った音声を従来の方法では発声出来なかった。聞き取れる範囲内の音声に歪めて聞き取り発声する。したがって、一般には何を言っているのか判らないことがある。

聴覚が正常な者も、母国語については正常であるが、外国語の音声は（母国語にない音声は)、聴覚神経が排除してしまい、近似の音声として聞き取っている。これは、いわば難聴のような聴覚障害と同じ状態にあるのである。

このことを、グベリナ博士は原理的に指摘し、言調聴覚論を提起し、ヴェルボ・トナル（ＶＴ）法を考案したのである。

こうして、言調聴覚論は、ザグレブ大学のペタル・グベリナ（Petar Guberina）博士が外国語教授法を考案する過程で、聴覚障害児の発語訓練に着眼し、大脳生理学（神経生理学）によって、聴覚の正常な者への外国語教育の発音矯正や発音訓練のための原理を、聴覚障害児教育の原理に見出した結果、生み出された。

グベリナはそれぞれの言語が固有の周波数域をもっていると考えた。アイヌ語とか主要なヨーロッパ語と比較すると、日本語の周波数域は低い。これは、「アイヌ語と印欧語の類縁性」で述べるが、低い周波数音は身体に馴染み易い。この特性を勘案して、外国人や聴覚障害者に日本語を教えることが出来る。ことに後者には、母音が中心である日本語は有利であ

る。母音は聞き取りも発声もし易いからである。

一般に高周波数域のヨーロッパの主要語をもつ諸国の中でドイツは十九世紀にすでに聾学校とは別の難聴学校を創設した国であり、難聴教育では最も進んだ歴史を有する国である。このドイツ（旧西独）から出版された著書『普通学校における難聴生徒』（Hannelore & Klaus Hartmann, Eds. , *Schwerhörige Schuler in der Regelschule* published by Bundesgemeinschaft der Eltern und Freunde schwerhöriger Kinder e. V. , Hamburg in 1989.）を禿憲仁研究員に纏めて貰ったので、難聴児・者の統合教育について日本の場合と比較しながら述べる。これは、「統合教育の問題点」と題する。

さて、グベリナの理論の歴史的背景を探るために、言語学のソシュール学派の流れの中のC. バイイの著書『言語活動と生活』を築山修道研究員が纏めて、グベリナの言語学上の業績への導入部となる論文とした。

アイヌ語と印欧語の類縁性

＜はじめに＞

アイヌ語と印欧語との類縁性を探る内に、アイヌ語は、日本語の音声の影響を受けて、本来の発音と違う、日本語化された音声になっているのではないかという疑問を抱いた。次の覚え書きは、言語の植民地化の実態と日本語の特性を明らかにすると考える。

(1)　「雲」について

アイヌ語では、「雲」を「ニシクル」という。これを拙著 *Yeats's Epiphany* の巻末の対照表では、'niscl' と表記しておいた。ゲール語では、'nial' 'neul' が名詞形で、形容詞形は、名詞形に語尾 '-ach' が付いた 'neul-ach' となる。Old Frisian では 'ulc-' 'olc-' から 'wolcn-' となる。Old High German には、'wolchan' がある。O. E. では 'wolcen' があり、異形に 'weolkyn' 'welkyn' があり、これから現代英語の 'welkin' となった。

(2)　「砂」「砂浜」について

織田信長の「織田」は、福井県の九頭竜川近くの地名では、'ota' と発音する。清音で発音するとアイヌ語となり「砂」「砂浜」の意味をもつ。千島や北海道の地名の 'uta' も 'ota' の訛ったものである。Scotch の'haugh' を OED で引くと「渓谷の川床の一部を形成する流域の平たい堆積土砂」とあって、さらに次のように詳述している。

The original sense was perhaps 'corner or nook (of land) in the bend or angle of the river'. A northern stream usually crosses and recrosses the floor of its valley, striking the base of the slope on each side alternately, and forming a more or less triangular 'haugh' within its bend, on each side in turn.

'haugh' は語頭と語尾が無声になり易いので発音上 'ota' は 'o' に近似になり同一にさえなり得る。語源は同じであろう。

(3)　「狼」について

洞爺湖から登別へ抜ける「オロフレ峠」は英語の 'wolf' を連想させる名であった。OED を引くと、案の定 Old Norse に 'ulfr' がある。「オロフレ」は日本語特有の母音を第一音節以外取ってしまうと、'olfr' となって、'ulfr' と殆ど同一となる。「狼」の意味のこの Old Norse は、O. E. の 'wulf' や Old Frisian の 'wolf' の類縁語として挙げられている。日本語化される前の「オロフレ」は、印欧語のこれらの類縁語と同質の言葉であったと容易に想像出来る。

村山七郎『北千島アイヌ語』によれば、北千島アイヌ語では、「狼」を 'orkiu' 'orkew' という。この 'kiu' 'kew' の 'k' は気息音［x］であって、日本語では「ケ」より「フ」と表記しやすい。'kiu' 'kew' は 'fr' と聞き取られ日本語独特の母音をそえて、「フレ」となったと考えられる。

だが、もう一つの可能性がある。手負いの熊等が「唸る」のをアイヌ語で 'oroperere' というが、この［p］は日本語では［f］になり易い。「オロフェレ」から「オロフレ」となったとも考えられる。おそらく両方が一つになり、「狼が唸る峠」の意ではなかったか。

('orkiu' 'oroperere' の 'r' が、本来 'l' ではなかったかという可能性はある。アイヌ語の 'r' と 'l' の混同は、日本人の聴覚がグベリナの理論からいって、母国語の日本語以外の音声を排除するため、生じた。アイヌ語の発声も日本語化されていると考えられる。)

(4)　「犬」について

アイヌの猟犬を 'seta' という。ラテン語と英語で 'seta' といえば、「剛毛」のことである。狩猟に出た猟犬が獲物に立ち向かう時毛を逆立てるが、その時の「剛い毛」の記憶が残って、猟犬の最も猟犬らしい瞬間のイメージが、「剛毛」として伝えられたのであろう。ちなみに、'set' は「寝床」を意味する。

(5)　「家」について

'set' は「寝床」であるが、これらのある処を「チセ」といって「家」の意味である。ゲール語（Irish）でも「家」の複数形は 'tithe' である。アイヌ語「チセ」は本来は 'tise' であったのであろうが、日本語には 'ti' の音声はないので「チ」に歪曲してしまったと考えられる。ゲール語の単数は 'teach' 'tigh' 'ti' である。語尾の '-ch' '-gh' は［x］の音声であって、この気息音の後に続く音声があると、潜在していた 't' が顕在化して、'-cht' '-ght' となる。'laugh' は 'laughter' に、'haugh' は 'haughty' となる。これはゲール語の習性であるが、同じように、アイヌ語でも 'tise' は後に続く音声があると、'tiset' となる。私見であるが、本来このアイヌ語は 'tisecht' 'tiseght' というように語尾に気息音を含む言葉であったと考えられる。同じように「砂」「砂浜」の 'ota' も語尾に気息音を含む 'o' に 'a' の音声が続くので 't'が顕われたと思う。

(6)　二十進法について

アイヌ語は二十進法であり、フランス語の数詞のように20を中心にして数を数える。ヨーロッパの言語は二十進法が主流である。アジア・太平洋の言語はアイヌ語だけが二十進法であるといってよい。金田一京助は『アイヌ語研究』選集Ⅰ（三省堂、昭和35年）で、ヨーロッパ語二十進法はケルト語（ゲール語）の影響とみなしている。原始印欧語には二十進法はないといっているので、ここでもアイヌ語とケルト語の間になんらかの関係が考えられてくる。わずかに南洋のメラネシヤでは二十進法をとるが、十以下は五進法であって、アイヌ語はそうではないので、これとは関係がない。アイヌ語は、ヨーロッパ最古の民族ケルトの言語ゲール語（Gaelic）と関係があると考えられる。その他の印欧語とアイヌ語との類縁性はゲール語を介してのことと考えられてくる。ケルト民族の足跡は先史古代を通し最も広範囲にわたるのである。

＜むすび＞

ゲール語の語尾 '-ch' '-gh' は、「湖」の語 'loch' 'lough' が同じ発音であるように、同じ［x］である。この気息音がアイヌ語にはあったと考えられる。そうでなければ、「家」'tise' と 'tiset'、「砂の川尻」'o' と 'ota' の変化の法則が成り立たない。'laugh' を名詞にするため語尾を 'er' にすると、潜在していた 't' が顕在化して、'laughter' となる。この 't' と、'tiset' 'ota' の 't' は同じ法則によって潜在したり顕在化したりする。アイヌ語とゲール語はこのような同じ法則に従っている。この 't' は後に続く音声があるかないかによって、顕れたり潜んだりする。

'tisecht' 'tiseght' とか 'ochta' 'oghta' とか表記したら本来の音声になると考えられる。これは決定的な類縁性である。同質性ともいえる。この共通の法則と二十進法で二つの言語の類縁関係がかなり立証されるが、これに単語の共通の語源が(1)(2)(3)(4)のように立証出来ればよい。

日本語になった地名にも気息音の名残りが見られる。「道」を意味するアイヌ語は、現在の発音では「フキ」となっているが、「日置」「法貴」という当字からして、「法貴」に含まれる気息音の名残りが、本来の発音を示唆している。

気息音は、ゲール語の場合、「鳥の囀りのように」聞こえる一つの原因ではないか。アイヌ語はさらに本来は濁音はなく清音だけであったのだから、「鳥の囀り」は一層高音であったと考えられる。アイヌ・コタンで観た「鶴の舞」は踊りながら鶴の鳴声を真似ていた。あの真似た鳴声は高い音声であった。

アイヌ語は、日本語と比較して、高周波音であるといえる。日本語は英語、フランス語、ドイツ語と比較しても、低周波音である。このことから、外国人や聴覚障害者に日本語の音声を教えるのは比較的容易だということが言調聴覚論から確言出来るのである。

（内藤　史朗）

統合教育の問題点―難聴児の場合―

1．普通学校に設置された難聴学級

ポーランドの例を引いて、「名目だけの統合教育で、特別学級の難聴児と普通学級の子供達と共通しているのは校舎だけである場合が多い」と批判している。

2．普通学級の難聴児の教育

ポーランドでは、二十年前から普通学級へ難聴児を入れようとする傾向があり、約十年前に難聴児を普通学級に入れる権利が認められた。行政の指示により普通学校は聴覚障害児を受け入れ、その代わり教員（大半は学級担任）には障害児のために二時間のレッスンが組み込まれる。しかし、この場合、普通学級の教員の方から聴覚障害児を受け入れることに対して、しばしば異議が唱えられる。その理由は、経験不足、障害児のレッスンに労力が必要になることに対する危惧、或いは、聴覚障害児には聾学校、難聴学校などの特別学校の方が適しているという理由による。

3．難聴学校

ドイツでは、難聴学校が難聴児の教育に最適としているようである。確かにドイツのように普通学校と同じカリキュラムで同じ資格を与えれば、社会が一人前に扱ってくれる国は、そうであろうが、日本のように難聴学校は一つもなく障害児の教育に予算を増やすことが困難な国では難聴学級という形でしか実現出来ない。

従って、難聴学級をもっと工夫して、将来子供が成長して社会へ出た時、統合され統合できるような人間に育成することである。障害児だけの学校で果たしてそういう人間に育成することが出来るのか、疑問が残る。

従来90デシベルを可聴域値の境界線としていたが、問題は「話される事柄を相対的に把握し、それに言語で反応する子供のもつ可能性」である。親としては、その子の可能性を信じ、現時点でのその子の言語理解力、発声能力を正しく把握して、その子に一番適しているのだと判断される進路を取るべく指導してやる必要があると結論づけることが出来る。この点は日本でも異論はないと考えてよい。

ただ日本は難聴者の社会での受け入れがドイツのように十分でない。これでは国の経済能力のわりに日本はきわめて遅れた面があると認識せざるを得ない。　　（禿　　憲仁）